

文明論としてのマンガ

— 星野之宣を通して考える —

春日井 眞英

★ 文明を問う

I はじめに

II 人間関係を問うものとしてマンガ III 時空の中の罪と罰

★ I はじめに

マンガを主題として書くというのは大変難しい。今でこそ、クールジャパンと称して世界に誇ってはいるが、このマンガの話をするのは難しい。その理由の一つに、マンガに対する意識、それを見つめていた人々の時代精神の差が問題となるからである。つまり、この文を書いている筆者の育ってきた世代の環境と、育んできてくれた親たちの意識環境が大いに問題となる。筆者も、

「漫画、なんて子供のものだからね」
「大人の大人が、漫画を見るなんて」

と、言うような批判的な声の中で漫画を見続けてきた一人である。そして、この世代はまさに戦後、団塊の世代の端くれに位置しているのである。親たちのマンガに対する厳しい声にも関わらず、時には隠れ、あるいは開き直りながらマンガを見ていた筆者たち世代は、いうなれ

文明論としてのマンガ

ばマンガという表現手段に共感しながらマンガを守り続けてきた抵抗の世代を生きてきたのであった。この世代が惹かれたのは、今でこそマンガ界の大御所ともいえるべき、手塚治虫や藤子不二雄をはじめとする多くの作家たちであった。彼らの活躍があつてこそのだが、マンガは表現手段でもあり、同時に伝達手段としてその地歩を固めていったのである。筆者はマンガが世代に受け入れられていった背景の一つに紙芝居の存在が否定できないと考えている。一九五〇年代にはこの紙芝居は、その時代の子供に共通した娯楽であった。しかも、単なる娯楽ではなくさまざまな情報が、この紙芝居によってなされていたと考える。そこには、勧善懲悪の世界が描かれていたり、おどろおどろしい世界が描かれたりしていたのであった。「紙芝居」は、こういった世界を描きながらある意味で教育的な情報提供を行ってきたと考えていい。鞍馬天狗、丹下左膳、その他いろいろな物語は、勧善懲悪の世界、歴史的な知識、さらには科学的な情報をばらまいたことを意味するのである。当然のことながら戦後の紙不足のなかで、書物という媒介はまだなかなか一般的にはならなかった。子供達に与えられたことは否定できない。また、無視してはならないのは紙芝居作家の存在であった。彼らにインスパイヤーされたマンガ家の一人に『三丁目の夕日』などで知られる西岸良平がいるのではなかったか。

なぜならば、彼の作品には紙芝居作家、あるいは貸本の執筆者が描かれていたからである。こういう紙芝居作家、あるいは貸本作家の存在があつてこそ、時流という波とともに子供達に刺激を与えていったのである。そして、時代の流れは、戦後の朝鮮戦争というきっかけによって大きく動いたのであつた。経済的に、また政治的にも。ただ、この事は、ここでは扱わない。記憶として大きく時代を動かした要因として記しておきたい。

ところで、ここでは漫画と表記せずにマンガと書くことにしたい。なぜなら葛飾北斎の『北斎漫画』と一緒にしてしまうからである。北斎のそれは、言うならば風刺画であり、スケッチであり人物、風俗、動植物、妖怪変化にいたる、言うならば一コマの下絵だからである。北斎の作品には、今のマンガに通じるポイントがたくさんある。ただそこには物語性がないと言うことで北斎の方は漫画とし、現代物はマンガと記しておきたい。また絵巻物のように一連の流れの中で、物語性を有するにもかかわらず、今となってはその物語を読み解ける者がごく限られた専門家に限定されていると言うことから、絵巻物は別枠で考えていきたい。『信貴山縁起絵巻』などはすでに一般的に流布していたと考えられる物語を前提としているにもかかわらず、今の時代では読み解くことが難しいという理由から、現代というマンガの領域に入れることは厳しい。それは、絵解きの場合にもあてはまってこよう。この問題は一コママンガにも適応できる。政治的な問題、世間で話題になっている事柄、それはある場面、あるシーンですべて時代の流れの中で明白になって来るからである。時代性、それを理解できないとすればマンガの持つ力が薄れて行くかも知れない。マンガには時代に即応する要素も求められるというべきであろう。それも、普遍性を有するものを・・・そのことは、海外のマンガなどと比較すれば明白になる。少なくともアメリカコミックスといわれているものを見る限りだが、そこにあるのは、単純な勧善懲悪であつたり

一寸したお笑い・・・と、いえるものでしかない(暮間に過ぎないが)。そこには表現する文化の力というものが隠れているのかも知れない。文化の力とは、かつての日本が仏教を受け入れて来たような力を指す。単に、導入されただけでは受容はされなかったであろうし、これほど浸透しなかったと考えていい。理論化され、体系化された仏教と非体系的な古代神道との葛藤が、古代日本の精神史を物語っているというのは過言であろうか。

一九五〇年の朝鮮戦争(朝鮮事変では別の事変と混同されてしまうようだ。)をきっかけとして経済的に大きな変化が生まれた。それは戦後期の経済的安定をもたらすきっかけとなる。そしてこの戦争のおかげで日本は新しい時代に向けて動き出す事ができ、新しい時代の礎が築かれるのであつた。経済的な変化は新しい発展のためのエネルギーとなり、トフラーが言うように日本はまさにこの頃「第三の波」に飲み込まれて行ったのである。街角テレビ、貸本の時代へと続きその流れの中に紙芝居の仲間、あるいは絵巻の系統という視覚による情報提供へと大きくシフトが始まったのである。つまり、マンガは文字文化からさらに視覚化された情報伝達の手段としてこの時代の中に根を下ろしてきた事を意味する。これは、同時に事柄、問題を省略したり、単純化したりすると言う作業をも含んでいる。そしてマンガには言葉によって抽象化された内容を、視覚化することによって、ある意味で単純化するという問題を孕むことになるのだが、忘れていけないことは情報提供の選択が書き手によってなされていることである。もちろんこれは普通の文字による作品でも同じだが、視覚されることによって、受け手側には一方的な情報伝達がなされると言つて良い。これは、ものごとがある一方の面からしか見て行くしかないという弊害をもたらすことになる。この種の問題は教育の現場にもある。答えの出し方、あるいは答えしか問題にしない教育。実は、答えに行き着くさまざまなプロセスが大変重要なのに、答え合わせで終わってしまう。このこ

とは、すでに註1で指摘したことに重なるので割愛するが、画一的な規格での教育という問題を内包することになる。つまり、理解を一面化させてしまうという危険性が生じるのである。このことはマンガ文化に隠されている問題としても認識しておかなくてはならないことでもある。

マンガは、先に述べたような意味で見る側の思考力を奪ってしまうこともある。ロールプレイングゲームのように中に入っているから、と言う反論もあるかも知れないが、筆者が指摘したいのは、受手側がマンガの登場人物がいままさに置かれている状況を理解しているか？ どうしてそうなったか、なぜそのようなことが起こりうるのかという洞察、思考に時として欠けるのではないかと憂うのである。

つまり、初めからそのような状況に置かれているのであって、なぜそういう状況に置かれるのかという事態を考える場所はほとんどないのである。バイオ・ハザードのゲームのようにいつの間にか、任務を果たすという仮想空間に巻き込まれていく。マンガ、アニメを見るときに考えておかななくてはならないことは「そのような仮想(バーチャル)の空間」が、なぜ想定されて来たか、という背景である。ゲームだから、あるいは面白いからと言うだけでは仮想空間の設定はあやふやになる。なぜならば、文字の世界も、映画などの視覚の世界も基本はすべて仮想空間に設定されているのだから。そこに描かれようとしているのは、「可能性のある」あるいは「起こりうる世界」の姿であり、「実際に起こりうる世界」の提示だからである。だから、こそマンガ家に求められるのは「現在」を通じて「未来」を提示することに他ならないのである。もちろん、その逆もまたしかりである。たとえば、主人公が子供であっても、確かに起こりえそうな、という蓋然性を持つ世界が示されてくることは納得できる。起こりえそうなこと、あり得そうな世界。これは、作家達のそれぞれの得意とする領域とも密接に関わって来るものでもある。

文明論としてのマンガ

あり得そうな未来、認識ができないかも知れない未来世界。これらは遙か昔より、哲学の主題でもあった。プラトンのイデア論をはじめとしてのものごとの認識に通じる世界は、ある意味で楳図かずおの作品領域にもつながるかも知れない。彼の作品は、一見ドタバタのホラーのように見えながら、現実の不条理を扱っていると見て良いだろう。ドタバタに見えるところに、不条理に直面したものの笑い、行動が浮き上がってくる。多分、ドタバタという笑いの甘さに包まれているから、その奥行きが読めないかも知れない。似たものとして、映画『マトリックス』を並べてみても可笑しくはない。現実と仮想の世界との間で揺れ動くことは、考えたくもないことだからである。だが、原因があって結果があると受け止めていけば、我々の存在するこの世界が仮想の世界なのかも知れない。こうなると、もはや哲学であり、思想の問題となる。われわれのモノの見方、考え方によってさまざまな世界が顕れてくることになる。また、映画のターミネーター・シリーズも巧みに、この因果関係を扱っている。未来から来た「男」の子を宿し、未来のために、その子供を育てるという過程は、必然的に登場人物を「頭のおかしな人」として社会から隔離することになる。つまり、未来と現在とが接触するかも知れないという発想は、この時代にはまだ危険なものなのかも知れない。未来から来る刺客などという、多岐におよぶ想像力が要求される視野に立たされると、これまで見ていたものとは全く異質な世界が広がってくることは否定できない。この視野に立てば常識と非常識の境目があやふやになるであろうし、ときには変人扱いされることになるかも知れない。だが、未来に対する新しい種子を産み出して行くのは、こういう蓋然性を持つ視野に立てた人たちなのである。しかも、彼らは他ならない「この現代」が産み出した人間であることは、重要である。現代の、善かれと思っただけであり、未来において逆の結果を生み出して行くというのは逆説的であり、考えさせられることは疑いない。

いふなれば、映画、マンガは娯楽でありながらも、啓示的な姿を取っていると言えるのである。読み手（あるいは受け手）である我々は、その啓示的な内容をどこまで受け止めることが出来るかという課題もある。もちろん、マンガだからと言ふ一言で片付けることもできるが、ダン・ブラウンの『天使と悪魔』で扱われたり、星野之宣の『サーベル・タイガー』所収の第五話「クワヴァデイス」でも、扱われている反物質と言ふものの存在は、今日二〇一〇年一月一八日のニュースでも知られるようになってきた。

この、ダン・ブラウンの『天使と悪魔』のなかでも、反物質の問題が扱われている、このことは大きな問題を孕んでいるのであるが、ここでは触れたい。おきたい。

★ II 人間関係を問うものとしてマンガ

視覚的に訴えるものとして、マンガの主題は感情を扱ったものが多いだらう。いじめられっ子のび太君と、いじめ役のジャイアン、そしてスネ夫君。ここには不思議な鼎立関係が生じている。そしてマドンナとしての静ちゃん。さらにデキスギ君やジャイ子と言ふ人間模様が現実の世界をある意味投影してくるのである。互いの力の力学が、ドラえもんのツール（道具）によって協力関係へと導かれていく。つまり、簡単に言ってしまうとマンガの主題は「人と人の関係」ではないと言っている。そのことは、ドラえもんをはじめとして考えてみれば明白である。だが、そこに人間関係のきしみを改善させるものとして異次元ポケットから取り出されるツールが働くのである。そこには、さまざまな提案が隠されていると見て取ることが出来る。しかし、読み方を変えれば事なかれ主義でもあるのかも知れない。プチ社会のさまざまな関係を子供という世界から扱っているものに対して、素直に、男と女の関係を扱っているものは数知れない。『東京ラブストー

リー』『新・同棲時代』、『家族の食卓』などの作者、柴門ふみの作品などは、男と女と言ふ人間関係、恋愛という主題を扱ったものであり、これらはやはり「人間模様」を主題としている。著者はそのような作品群の中で注目したいのは近藤ようこの『心の迷宮』であり、斎藤ナズナの『迷路のない町』である。これらの作品では些細な人間模様の崩れゆく姿やきっかけが扱われている。それは、作者の女性故の繊細さからかも知れない。しかし、柴門ふみは現代的な視点とでも言うべきか、さらりと割り切つてそういう世界に触れないでいこうとしている。これは、弘兼憲史の『黄昏流星群』にも通じていくテーマでもある。なるべくして起こる事件、あるいは悲劇の背景には仏教で言う「因果」の関係が潜んでいるのかも知れない。だからこそ、悲劇という罰が訪れるのであろう。これは、もはや人間にはどうすることのできない領域に属するのだ。

マンガの描く世界は、子供の世界だけでなく子供から大人に通じ、さらにさまざまな人間模様のドロドロとした領域にまで踏み込むものも少なくない。それは、エロティシズムであり、バイオレンスでもある。人間関係のさまざまな関わりの中で醸し出されてくる問題であるが、描き方は難しい。しかし、明らかにかつての絵物語の領域から大きく踏み出していることは見て取れる。信仰、救済という主題から、生きる人間の現実世界に大きく踏み込んでいくからである。当然のことながら、このような主題の変化を考えるには時代背景を問題としなくてはならないことになる。

だが、共通しているのはさまざまな「人間模様」である。「男と女」という主題は人類が存続し、雌雄異体でいる限り続くものであることは否定できないし、また時代の流れの中で姿かたちを変えて、顕われてくる。マンガという表現の対象にはこの種の「人間模様」いや、人間のあり方が大きく関わっていることは否定できない。この男と女というテーマはもちろん星野之宣の作品の中にもある。時間と空間を超

えて扱われる主題は、人間関係の複雑さと奥深さを訴えてくる。星野之宣のテーマの一つに「かぐやひめ」、「浦島太郎」があるがそこには、時空を超えた人間の想いを捉えようとしている。ただ、「時のつり合い」という言葉で許されることのない領域の存在を指摘している。それは、人類に対する警告であるのかも知れない。

くりかえすが、マンガの世界は「人と人の関係」が重要な役割を有しているのである。それが、どのような形で描かれているかである。

また、マンガは、物語性を持つことによって、それを見ているものとの間に共時的なつながりを形成すると同時に、普遍的世界に案内してくるのでもある。だから、共感が生じ仲間意識が芽生えていくといえる。

ここで、劇画も一応マンガとして分類しておきたい。



(星野之宣・宗像教授異考録・第六集・再会)

「人と人の関係」それは、様々な形で問われている事に注意しておかなくてはならない。よく知られているものとしては、『ドラえもん』である。野比君の家、家族、学校、級友、先生そして隣人。またそれらをつなぐドラえもん。そこにはさまざまな人間関係が描かれている。ドラえもんの道具は、いじめられっ子的存在のび太君、彼を補佐するものであるがドラえもんはその妹のドラミちゃんと、のび太君の孫という人間関係の

中に置かれている。ほとんどの作品の根底には「人と人との関わり合い」がさまざまな姿で語られているのである。ワンピースでも、ナルトでも同じである。いや、マンガであれ、文学であれ、根底に「人と人との関係」がさまざまに問いかけられている事は否定できない。

★ III 時空の中の罪と罰

さて、こういう著者も「マンガなんか見ていないで！」

と叱られた口であり、自分の体験に合わせて子供達がマンガを見るのを擁護した優しい父親(?)であったと思っている(?)。だから、『ドラえもんシリーズ』の諸々の作品や『三国志』手塚治虫の『火の鳥』『仏陀』、藤子不二雄や水木しげるの作品などはまだ、家の書棚の片隅を占拠している。

もちろん、すべてのマンガが有意義なものと考えているわけではない。そこには、読む側、あるいは読ませる側の「選ぶ」という、取捨選択の作業が存在する。この何を選び、そして受け入れるかという作業が大変難しい。物語性に注目したものもあれば、主題が面白いからという理由で受け入れた作品もある。筆者はマンガの扱っている世界に注目している。

藤子不二雄の作品のように、子供向けと思えるものですらそこには現代社会あるいは未来に対する危機感がある。それは忘れられていくナニモノかに対する視線でもありと考えている。とくに、妖怪もの、言い方を変えるならば、非科学的領域の作品、そこには科学万能を信じている世界に対する疑念が仕込まれていると見ることが出来る。この視点は水木しげるにも多く見ることができ、さらに諸星大二郎にもあてはまる。最近では見かけなくなったが、とり・みきの『石神伝説』にも注意したい。この作品は民間の、いや民俗の世界に潜む闇の領域に焦点を当てて古代史を見直そうとしているものであると言って

良い。この領域の作品を新しい視点で書いているものとしては、先に触れた諸星大二郎、星野之宣、岩明均を挙げることができる。諸星の作品は、『孔子暗黒伝』、『暗黒神話』、『稗田礼二郎』シリーズ（別名『妖怪ハンター』）であり、星野は『二〇〇一夜物語』、『ブルーワールド』、『ブルーホール』と世界的な規模で時間と空間を超えた世界と現代とを結ぶ作品で問かけている。著者が彼の作品に触れたのは『二〇〇一夜物語』がはじめであるが銀河系全体に及ぶ彼の視点に魅了されたと言って良い。ノアの方舟の宇宙版ともいえるこの作品は、後発の新型宇宙船に追いつかれ、目的と手段の混乱に葛藤する前期宇宙移民と、それを送り出した人類との間で引き起されてくる苦悩は暗示的である。星野は、宇宙、いや銀河的規模をテーマとした作品を描いているが、同時に古代に眼を向けた作品も多い。それは、未来は現在、いや過去を基盤として成り立っているという視点であるのではないだろうか。それは、星野が『二〇〇一夜物語』



(星野之宣・『二〇〇一夜物語』第十七夜)



(星野之宣・『二〇〇一夜物語』第十八夜)

「人間は……自分が罪を犯した場所では生きていけないのかも知れない……地球に残る人間……異星に根付く人間……人はただ罪のあかりに引き寄せられるのかも……」と、興味深い発言をさせている。もちろん、この言葉の背景を考えなくてはならない。かつて彼は、プラネット・ブルーと呼ばれる地球によく似た星に植民地作りのための初期探検隊員として、降り立っていた。彼らの任務は人類に危険性を及ぼす可能性のある生物を抹消することであった。その過程で、彼らは、自分たちよりも強く、怖い存在に擬態する生命体に出会い（ここでは、探検隊員に擬態する）、隊員同士互いに殺し合いをしたあげく、ローレンスは恋人でもある上官を殺し、錯乱する。そして核ライフルの弾を発射し、星に大きなホールを残し彼は地球に強制送還される。……十五年の時間を経て彼は再びこの星に戻り、件の話を乞われてするのであるが、彼はその後姿を消す。過去のある時点への回帰。それは恋人であった上官ステラと過ごした世界・時間への回帰願望であったのかも知れない。任務とはいえ、殺戮をくりかえした彼に与えられた罰とは、時間の静止であったのかも知れない。だからこそ、彼ローレンス・ホールは静止した時間を動かそうと、この星に降り立ったのであろう。視点を違えて、女性の側から静止した時間を扱ったものもある。それも、『二〇〇一夜物語』の「第十八話 愛に時間を」であるが、これはブラックホールに呑込まれて行く宇宙飛行士の妻シャロットが、三十年という時間を超えて元の夫の

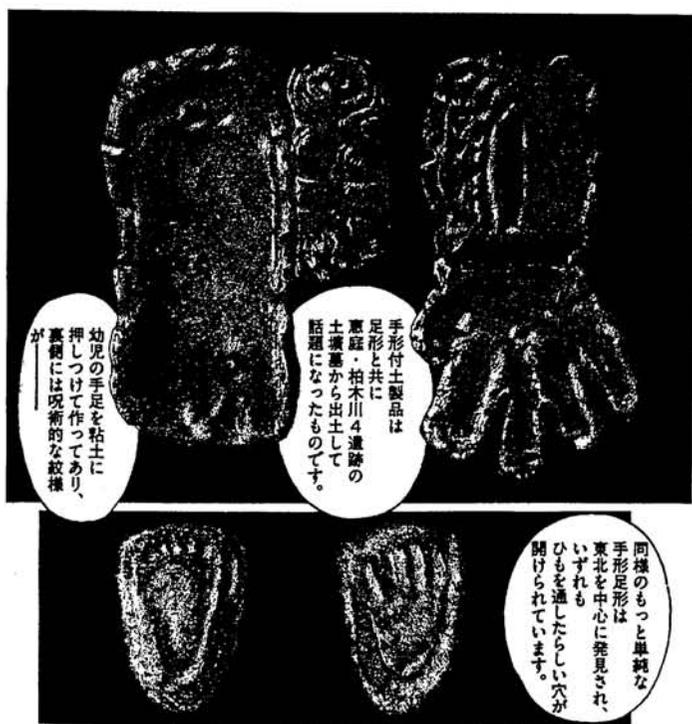
乗る、宇宙ポッド(艇)に近づくという話であるがブラックホールの外では二十五年という年月が流れる。そして、その間彼女は再婚し一見幸せそうな人生を送っている。しかしマンガのコマの中に描かれていない部分に、もとの夫宇宙飛行士、ラザルス・ラングは生き続けた。そのために、彼女シャーロットはブラックホールに呑込まれゆくラザルスの最後の一分間に間に合わせようと夫の友人であり、いまは宇宙貨物船の船長になっているビッグの船で赴くのであるが実は、シャーロットの夫は彼ビックの身代わりとして事故に遭い、ブラックホールに呑込まれつつあったのだ。彼が、何度も彼女の下に来ていたのはローレンス・ホールの「人はただ罪のありかに引き寄せられるのかも・・・」に重なるのであろう。やむを得ないことではあったのだらうが、彼は心に「罪の意識」を持ち続けた。彼のできることは、ただ見守ることしかなかったのである。

罪と罰、とくに星野が言わんとするのは浦島などのように時空を超えた愛の蹉跎であろう。出会いと別れ、これはもはや宗教的な領域に属するものでもある。仏教でいうところの愛別離苦、その出会いによって生じる因果応報という問題が彼の作品の各所に散在している。

そのような作品群の中で著者が注目するのは、昔の、影のように生きてきた人々の生活に向けたものである。著者が「影」と言ったのは、小さな発掘品、あるいは些細な伝承からその背景の一端を拓いて見せるからである。見落としがちな古代の人々の心のそよぎを感じさせ、現代に生きる我々に共時的意識を伝えてくれるからである。

『宗像教授異考録』(第十集)第二話に見る「小さきものの手」は心臓に奇形を持つ子供と、彼の親たちの気持ちを手形付き土偶を用いながら描いているが、それらは、普遍的な人間の感情を示しているばかりではなく、古代の遺物の見方を教えてくれていると言って良い。過去から現代に向けて生きてきた人間の中に存在する優しい気持ちを彼は指摘してくれている。このような日常的な視点から、非日常的な

文明論としてのマンガ

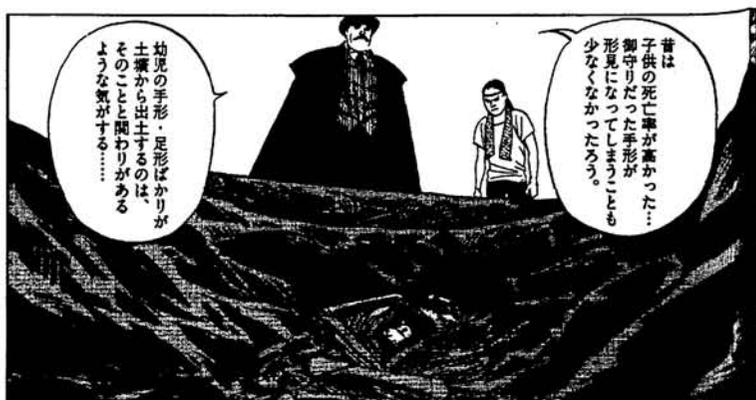


(星野之宣・『宗像教授異考録』・第十集・小さきものの手)

視野に涉って星野之宣は日本文化の根幹のテーマを扱っているばかりではなく、人間の持っている姿を考えさせてくれている。万葉の時代に、山上憶良が子供の屈託のない笑顔や、仕草などから「しろがねもくがねも玉も何せむに まされる宝 子にしかめやも」と詠った。いかなる時代であっても子供はかけがえのない存在として受け止められている。だから、重病な子供であっても親の眼には、常にかげがえのない存在として映っているのである。それは、未来への希望であると共に、自分たちの存在感を示しているのであろう。先ほどの「小さきものの手」は、子供を得ながらも、失っていく家族に平行して子供を

産む事が健康上の理由から拒まれる独身の女性が描かれている。そこには、産む性と生まれ来るものと言う問題があり、生まれ来たものを育む空間が想定される。

そして、古代から連綿と継続されて来る人間の世界はこの産まれ、産み、育てると言う行為の中で、苦しみと悲しみをどれほど積み重ねて来たのであつたらう。歴史の中に呑込まれ、ほとんど振り向かれないくなっている喜びと、悲しみと、切なさが一片の発掘品に反映されているわけだが、それは星野之宣が『ヤマタイカ』シリーズ、『宗像教授』シリーズで取り扱っているテーマでもある。それは人間の営みであり、その繰り返しの日常の積み重ねが歴史になり、同時に文化として発展していく。かれの作品は、人間を実に多岐にわたって見つめているのである。しかもこれらの作品の主題が、日本だけにとどまっていなことは明白だ。日本の山姥の話から西洋の魔女の話へと、人間あるいは男と女その子孫へとあたかもDNAを解きほぐすかのよう、時間と空間を交換しながら展開していく。彼の持つテーマ、主題の多義性は大変興



(星野之宣・『宗像教授異考録』・第十集・小さきものの手)

味深い。だが、それは読む側に相当な負担を要求してくる。

著者は彼の高校時代の作品『月夢・原型』(一九七二)、『PILLOTS 初期画像集成』(チクマ秀版社二〇〇六年)それから発展した『妖女伝説』(二〇〇六年(チクマ秀版社))所収の『月夢』を評価している。八百比丘尼伝説と融合するかたちで描かれたその作品は伝説と、ヴィジョン(幻覚)を混ぜ合わせるように現代と過去、そして未来を行き来するのである。それは何も、星野の作品に限るわけではない。また、同時に星野の作品はやはり人間の深い感情の交錯が時間空間を超えて描かれようとしていることを指摘しておかなくてはならない。

とくに彼の作品では時間について考えさせられることが多いのも特徴である。彼の扱う時間はあたかも五十六億七千万年という弥勒の生まれ来る時間の中の営みのように感じさせられる。ヘルマン・ヘッセの『ガラス玉演技』や、『荒野の狼』、『シッダルタ』に描かれている川面に映つる水泡の一つ一つが、あたかも結んで消えていく世界を象徴していたように、また、『荒野の狼』でパブロが描き出した諸々の人生を映し出していたカードを見るように作者・星野はこの世界を高見から眺めているかのような印象を与えてくれる。これは著者の深読み(のせい)であろうか……。いや、ここには愛知県北設楽界隈に伝わる「花祭」に通じる時間観念があるといっても過言ではなからう。生まれ浄まりの意識を背景に行われる霜月神楽には「大宝蓮華」の華を咲かす事を目的とし、その花びら一つ一つがこの世間(世界)であると祭文(まじり)に唄っている。つまり、祭を司るものはこの種の世界の出現を祭場に見ていたのである。星野之宣もこの世が無数の時元と空間をつなぐ司祭的な視野で世界を見ているのではなからうか。

司祭的あるいは預言者的な視点という言葉が過言だとしても、やはり星野之宣は歴史の流れの中で伝説という、特異分野に踏み込みながらかなり自由に古代の世界を泳ぎ回っている。そこは、『風土記(肥前国)』の世界であったり、『日本書紀』の世界であったりする(『宗

像教授伝奇考』第三集、file 一三三の佐用姫の河)。治水対策の背景に広がる人柱伝説を現代の政治に結びつけながら描き出す世界は絶妙であり、その背景に歴史的なまなざしが向けられていることには驚かされる。しかも、彼、星野特有の「罪と罰」という構図はしっかりと描かれている。

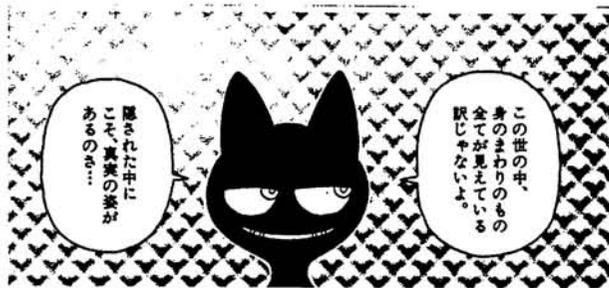
マンガとは、いまや単なる娯楽の道具ではなく思索表現の手段であり、情報交換の場と言っても過言ではない。岡崎二郎、谷口ジローらも共時的空間の探求者であり、彼らも時空を超える試みをしている。岡崎は『トワイライト・ミュージアム』作品集(一)の「契約」では、新入小説家が悪魔と契約を交わして賞を取る裏話を載せている。そして作中の悪魔は、壺ならぬビデオテープの中に封印され、そこから逃れ

出すためには誰かが、悪魔の身代わりにならなければならないというシチュエーションを設定させている。一見、アラジンの魔法のランプのような背景にしながら日本的な昔話を絡ませて見せている。安直にナニモノカニ頼ろうとする我々の気持ちを見抜いているかのように見える。そして、

この世の中、身の回りのものすべてが見えている訳じゃないよ。

隠された中にこそ、真実の姿があるのさ……

と、悪魔にうそぶかせている。しかも、この作品は平行して、名前の持つ重要性を教えている。



①『契約』『トワイライト・ミュージアム』岡崎二郎作品集

人類学の世界でも、また北欧の『カレワラ』などの文学の世界でも名前の持つ重要性は知られているが、その価値、あるいはその名前を知る事の意味まではなかなか説明されていない。また我々にはまだ希薄であるが「契約」の意味を問いかけているのである。さらに岡崎は別の作品を通して、ハイテク技術の落とし穴を指摘しているのである。これも『トワイライト・ミュージアム』第二話「機械仕掛けのジャングルの中」で特異体質(身体に電気を起こすという)の女性を通じて、ハイテクな医療技術にも人間の身体の不思議を再考するように促しているのを見て取れる。しかし、著者は彼の多くの作品の中でハイテクに溺れる現代人に対する警鐘をならしていることも同時に指摘しておきたい。

星野之宣に限らず、現代に対しさまざまな警鐘を鳴らしている作家は多い。ギャグや笑いなどのような領域ではなく、近未来あるいは日常に潜む問題を描いているものが多々存在する。その作品は、可能性の世界を描いているのではなく蓋然性の世界を見据えていると言って良い。例えば、『太陽の黙示録』を著わしているかわぐちかいじ、『島耕作』シリーズで日本社会あるいは経済に鋭い切り口を向けている弘兼憲史らは無視するわけにはいかない。もちろん彼らの作品はいま名前を挙げたものだけに限らない。彼らは、現代、そして未来の日本に起こりうる姿を想定し、考えた発言を作品を通して行っているのである。つまり政治、社会、文化といった側面にマンガを踏み込ませている作者として注目すべきだと考えている。もちろん著者が風刺マンガの類を否定するわけではない。

このほか、岩明均の『寄生獣』、『七夕の国』はホラー的な作品と見ることができ、ここには人間を取り巻く、数値化された価値基準の世界への畏れを見ることが出来る。人間の世界は画一化された基準では測り知ることのできないものを有している。だから、このように作品を並べてみるとマンガはさまざまな問題提示をしてくれているこ

とに気がつく。宇宙的な規模から見ているものもあれば、近未来を暗示するものもある。それは、現代日本の足下のもろさを指摘しているものでもある。小松左京のSF小説『日本沈没』（一九七三）のように、二度もマンガ化されているのは、その重さが解っているからかも知れない。たかがマンガ、されどマンガの持つメッセージがどのように伝わって行くのかが興味深いところである。マンガには昔の教えと同じ性質が秘められているように思われる。『仏説譬喻経』に見る旅人が、狂った象や虎に諭えられる社会で追われ、一時的に身を古井戸の中に潜め、安心をしているが、実はかえって怖ろしい状況の中にも用いられている話がある。この物語は安岡章太郎の『花祭』の中にも用いられている。これからの作品は我々日本人の置かれている状況を暗示しているものということができる。

たかがマンガ、されどマンガ その奥底は一体何処に繋がっているのだろうか？

★ 註

(註1) アルビン・トフラー『第三の波』日本放送協会一九八〇年

彼は、我々人類の文化を波にたとえ、その始まりを約一五〇〇〇年ほど前の農耕から考察してくる。そして第二の波を産業革命と見立て、一八世紀から一九世紀にかけて起こったと、考える。

この工業化により、それまでの農耕社会から産業社会へ文化は推移して来るとした。そして、このときには社会の主な構成要素は、核家族、工場型の教育システム、企業である、と論じたのである。さらに、トフラーは次のように書いている。「第二の波の社会は産業社会であり、大量生産、大量流通、大量教育、マスメディア、大量のレクリエーション、大衆娯楽、大量破壊兵器などに基づくものである。それらを標準化と中央集権、集中化、同期化などで

結合し、官僚制と呼ばれる組織のスタイルで仕上げをする。」言えなければ、画一的な規格が求められることを意味しよう。ここに、現代日本の病巣を見ることが可能になる。そして、第三の波は脱産業社会（脱工業化社会）である。一九五〇年代末頃、トフラーはこのことを指摘しているが、このころはAI化の始まりの時代でもあった。トランジスタが真空管に置き換わり、ラジオがポケットサイズに変わってしまったのもこの頃である。そして、トフラーは多くの国が第二の波から第三の波に乗り換えつつあるとした。彼は、この第三の波を説明するのに情報化時代、情報化社会、情報革命といった言葉をも利用している。

つまり、我々はこの情報化社会の最中にあることになる。問題はマンガなどでも判るように膨大な情報の中で何をどのように処理していくべきかであり、どのようにして自分を見失わないようにするかという点に凝縮されてくると言っている。そういう意味で、著者はマンガを現代社会における指針と想定してみたい。

(註2)

ダン・ブラウン著のサスペンス小説。アメリカでのポケット・ブックス社発売は二〇〇〇年だが、日本ではそれを追って二〇〇三年、角川書店から上下巻で発売された。

(註3)

『中世の神事芸能 花祭の伝承』「大土公神経」一〇三頁 北設楽保存会 昭和五五年

・・・ 臍の内より千葉の蓮華開け出づる 蓮華は散りて世界は国土となる、一つ百億、須彌百億、梵天百億、日月百億、鉄圍山百億、業火百億、大小諸神・・・そして、須弥山のことを細やかに述べていく。

(註4)

この種の領域が、著者の本来の研究領域である。

彌永信美『大黒天変相 仏教神話学 I』法蔵館二〇〇九（二〇二） 五一六頁で以下のように記している

義浄訳の『仏説譬喻経』は、次のような物語を伝えている。

あるとき、一人の旅人が曠野で一頭の「悪象」に襲われた。必死で逃げて、空井戸 があるのを見つけ、脇に生えている木の根に掴まり、井戸の中に隠れた。ところがそこには黒と白の鼠が現われて、木の根を齧り始めた。また井戸の周囲には「四毒蛇」がいて旅人を狙っている。さらに下にも毒龍がいて食いつこうとしている。旅人は大いに恐れながら、掴まっている木の根を見ると、そこに蜜が垂れているのを見つけた。彼はその蜜を五滴舐めた。木が揺れて蜂が舞い上がり、旅人を刺した。また野火が拡がり、木を燃やし始めた。

これらはすべて譬喩である。曠野は無明長夜の喩であり、象は無常の喩である。井戸は生死の喩であり、木の根は命根の喩である。黒白の鼠は昼夜を表わし、四毒蛇は四大を、蜜は五欲を、蜂は邪思を、野火は老病を、また毒龍は死を表わす。ゆえに、人は常に生老病死を恐れ、五欲に呑み込まれるのを避けねばならない……。

この経典は、全部で六百五十字ほどの非常に短いものだが、さまざまな興味深い問題を含んでいる。第一に不思議に思われるのは、これほど印象深い物語であるのに、その類話が漢訳仏典やパーリ語仏典の他の説話集などに（簡単な調査では）ほとんど見いだせないことである（ただし一つだけ、偶然に見つけた類話が『寶頭盧突羅闍為優陀延王説法経』にある。興味深いことに、彌永はこの寓話がヨーロッパにでも広く伝えられていてグルジア語のヴァージョンでは、「象には人を追いかける死」の意味があると言い、また白と黒のネズミには時間を暗示すると指摘する。つまり、ここにははからずも時間に関わる問題

文明論としてのマンガ

が存在していると考えてよい。それは、星野之宣が描いている「罪と罰」が「時間」を超えていくことも無関係ではなからう。

安岡章太郎 『花祭』 安岡章太郎全集 II 講談社 昭和四六年 五七頁

むかし一人の旅人が曠野（こうや）を横切ろうとしていると突然、荒れ狂った象が襲ってきた。果てしない草原には逃げ出そうにも、隠れる場所がない。だが恐ろしさのあまり夢中になって駆けていると、ふと草むらの中に古井戸があった。井戸には藤蔓（ふじづる）が一本、垂れ下がっている。天の助け、とその男は蔓をつたって井戸の中におりた。おそろしく深い井戸だ。上を見ると狂った象は牙をむいて覗きこんでいる。しかし目方の重い象はこまでは降りてこれないだろう。ほっとして旅人は井戸の底をみた。すると底に水溜りのように光っていたものがうごいた。それは大蛇で、口を開いて旅人の落ちてくるのを待っていた。周囲を見廻すと、井戸の内壁にはびっしりと毒蛇がからみついて、こちらを狙っている。それも前後、左右に何疋もいるのだ。たのむのは、たった一本の藤蔓だけだ。しかしその蔓も、よく見ると上の方で黒と白のネズミが、その根を齧（かじ）っているではないか。男はアキラメて目を閉じた。すると、その口に何か甘い汁が落ちてきた。藤蔓の根もとに蜜蜂の巣があり、そこから甘い蜜がポタリ、ポタリ、と彼の口に落ちかかってくるのだ。旅人はその一滴の甘さが口いっぱいひろがるのを夢中になってしゃぶりながら、他のすべてのことを忘れた……。